

## 青年期の対人関係における攻撃性の表出と アサーション及び自己評価との関連

菊 浦 友 美\*・吉 岡 和 子\*\*

**要旨** 本研究では、まず、対人苦手意識場面、通常の対人場面における攻撃性の違いに関する検討を行った。次にアサーションの自己表現に対する肯定的態度、他者尊重及び自己評価と攻撃性の関連を検討した。調査対象者は、福岡県立大学の学生（女性132名、男性22名）で、分析に用いた人数は148名であった。

本研究の調査結果からは、言語的攻撃性と間接的攻撃性の違い、場面による攻撃性の違いが明らかになったと思われる。言語的攻撃性のように、直接相手に自分の気持ちを表現する攻撃性の表出の背景には、自己評価や肯定的態度などの個人の心理的要因が関連していることが予想される。一方、間接的攻撃性は、自分の気持ちを主張しようとする動機づけの役割として働く攻撃性とは異なり、どのような対人関係かでその表出が左右されることが考えられる。この間接的攻撃性には、自分が置かれている環境が影響を与えているのではないと思われる。

**キーワード** 青年期 対人関係 攻撃性 アサーション 対人苦手意識

### 問題と目的

#### 1) 青年期の対人関係の希薄化と攻撃的コミュニケーション

現代社会ではいじめのように攻撃的なコミュニケーションに関する問題が多く生じている。この問題は学校などの場面のみでなく、社会全般に広がる問題として注目されており、重大な問題であると思われる。廣貫（2002）は、現代社会のいじめは、現代青年の友人関係の希薄化との関連が考えられると述べている。そもそ

も青年期の交友関係では、新たな自己像を形成するために、相手との身体・自己開示・相手への忠誠を基盤とした親密で有意義な関係性を維持することから、青年期では親密な友人関係が展開されるものと考えられている（Atwater、1992）。しかし、現代青年の友人関係は希薄化しており、親密な友人関係をもちにくくなっていることが近年の研究により明らかにされている（落合・佐藤、1996；岡田、1999；岡田、2002）。希薄化とは、人との深いつながりを持つことに関して積極的に働きかけない、また深

\* 福岡県立大学大学院人間社会学研究科心理臨床専攻修士課程1年

\*\* 福岡県立大学人間社会学部人間形成学科講師

い対人関係を持とうとしてもそれらが得られにくい傾向のことを指す。青年期の友人関係について調査した長沼（2001）の山アラシ・ジレンマの研究によれば、現代青年の友人関係においては「近づきたいけれども近づきすぎたくない」という葛藤が生じることを示しており、お互いの心理的距離を一定に保とうとする傾向があることを指摘している。

さらに、情報社会の急速な蔓延により、現代青年は以前にはなかった対人関係への課題に直面している。例えばメールやインターネットによる非対面的なコミュニケーションの変容は、使用率が最も高い現代青年に影響を及ぼすのは必然である。また非対面的なコミュニケーションは希薄化をさらに促し（白井、2006）、現代青年のコミュニケーションの負担はますます大きくなっていると考えられる。

対人関係の希薄化は、他者と親密なコミュニケーションの交流が行われないことから、社会的スキルの減少や、自我の発達が進められないことが考えられる。そのため、自己をコントロールし、適切に自己表現する方法や、他者の思いやる気持ちが促進されないことが予想され、これらのことから、いじめのような攻撃的な行動に結びつくのではないかと考えられる。そのため、現代青年の対人関係におけるコミュニケーションに注目することは、青年期の対人関係を理解するうえで重要であると思われる。

## 2) 攻撃性と適切なコミュニケーション

攻撃性という概念について、一般的には暴力や問題行動など人を傷つける不適切な行為であるとみなされることが多いように思われるが、対人関係において重要な働きをする概念である主張性と相関があるとされている。

主張性とは、代表的な定義としてWolpe（1958）によると、「多少とも攻撃的な行動だけでなく、好意的な感情や愛情のこもった感情、その他の不安ではない感情の外界への表出」と定義されている。つまり、主張性はコミュニケーションにおいて自分の考えや感情を素直に表現することを示すといえる。この主張性は、攻撃性との有意な相関があることが研究によって示されている。古市（1993）は、児童の主張性とY-G性格検査の攻撃性尺度について重回帰分析を行った結果、有意な関連を得たことを示し、「両者は共通しているといえるかもしれない」と述べている。攻撃性はこのように他者に対し自身の気持ちを表す働きとしてコミュニケーションにおいて作用していると考えられる。

一方、近年重要視されている適切なコミュニケーションの1つとしてアサーションがある。アサーションとは、「自分も相手も大切にしたい自己表現」（平木、1993）のことであり、自己及び他者を尊重し行われるコミュニケーションのことである。そして、アサーションと攻撃性とは関連があることが指摘されている（沢崎、2006）。それは、先ほど述べた主張性の概念と共通する部分、対人関係における適切な自己主張の部分との関連である。そのため、攻撃性のもつ積極性や行動への動機づけがアサーションと関連性をもっていると考えられる。

アサーションの定義については、大きく2つの立場に分けられるとされている（伊藤、1998）。一つはSocial-Skill-Traning的立場と、もう一つはPerson-Centered-Approach的立場である。前者は「アサーション＝社会的スキルの一つ」と考え、アセスメントは行動面について中心に行われている。そのため、先行研究

では攻撃性と関連が示されたと思われる。

一方、後者のPerson-Centered-Approachの立場では、アサーションの意義は「アサーション＝自他尊重に基づく率直な自己表現」とされ、心理面が本質なものとして重視される。他者尊重は攻撃性とは対照的なものであり、アサーションと攻撃性の具体的な違いを示す要素であると考えられる。また、アサーションには自己主張を行う社会的スキルのみならず、他者を尊重する個人の心理が必要であると考えられる。本研究において使用する伊藤（1998）の尺度は、アサーション概念の重要な要素である他者尊重と、自己尊重、自己表現に対する肯定的態度の項目が作成されており、アサーションを心理面から捉えることができると考えられる。

しかし、アサーションの他者尊重の要素を含めて、攻撃性との関連を検討した研究は少ない。そのためアサーションと攻撃性の関連性と相違点を具体的に示すことは今後のコミュニケーション研究において重要であると思われる。本研究では、個人のコミュニケーションにおける重要な概念である攻撃性、自己表現、他者尊重をとりあげ、その関連を調査する。

### 3) コミュニケーションと対人場面

コミュニケーションは社会の動きと連動して、日々変化しているものといえる。現代の高度情報社会では、コミュニケーションの形態は多様化し、電話、FAX、インターネットなどを使用した非対面的なコミュニケーションが活用されている。

一方で、ネットいじめなど新たなコミュニケーションに関する問題が生じており、そのような問題は現代青年に特に大きく影響している。このことから、現代青年のいじめに関連し

た研究を早急に行う必要があると思われる。

しかし、実際の場面、例えば対象者に、いじめの場面や特定の嫌いな他者との対人場面を想定させるなどの調査は倫理上の問題がある。さらに、対面・非対面というコミュニケーションの場面の違いによる攻撃性について調査するのは難しいと考えられる。そこで、本研究では対人場面における、対人苦手意識を取り上げる。対人苦手意識とは、「特定の他者に対する否定的・消極的な態度」（日向野・堀毛・小口、1998）のことであり、対人場面においてほとんどの人が日常的に感じている意識で、苦手な人との間に否定的な関係を認識させる意識のことである。対人苦手意識と意味が混同しやすいものに対人不安があるが、対人不安は全般的な対人場面において抱く状態を指す。一方で対人苦手意識とはある他者を特定し、その他者との間で生じる意識であることから、その点で異なっている。対人苦手意識は誰もが思う意識であり、否定的感情を抱く対人関係が想定しやすいものと思われる。そのため、対人苦手意識場面における攻撃性について調査し、苦手ではない友人とのコミュニケーションを行う通常の対人場面の攻撃性と比較する。

### 4) 対人関係と自己評価

青年期の対人関係における苦手意識について調査した日向野・堀毛・小口（1998）の研究によれば、苦手意識が成立する三つの要因を推測している。そのなかの一つとして劣等感や評価懸念などの苦手意識を抱く個人的要因の存在がある。対人苦手意識の背景にはこのようなコミュニケーションをする側の、主体的な要因が存在していると考えられる。また、適切な自己主張ができない背景には、自己評価の低

さあるいは自信の欠如が関連している（古市、1995）。自己評価とは、自分に対する評価のことであり、梶田（1988）は、自己評価の特性を4つの側面に分けている。4つの側面のうち1つの側面では、自分の周囲にいる人や自分の内面で想定した人と、暗黙のうちに比較対照することで成立した自己評価の感覚や意識、すなわち劣等感や優越感の側面が自己評価にあるとしている。このような自己評価の側面が個人のコミュニケーションに大きく関連していると思われる。これまでの見解で、攻撃性の表出においても、対人苦手意識場面においても自分の内面にある自己評価の関連性が先行研究によって示されていることから（日向野・堀毛・小口、1998）、現代青年の対人関係のコミュニケーションにおいて、重要な心理的要因であることが考えられる。

## 5) 目的

本研究では、まず、対人苦手意識場面、通常の対人場面における攻撃性の違いに関する検討を行う。次にアサーションの自己表現に対する肯定的態度（以下、肯定的態度）、他者尊重及び自己評価と攻撃性の関連を検討し、現代青年の対人関係のコミュニケーションの理解の一助としたい。

仮説は以下のとおりである。

1. 「通常の対人場面」における攻撃性得点より、「対人苦手意識場面」における攻撃性得点が高い。
2. アサーティブ・マインド・スケールの肯定的態度得点と攻撃性得点とは、正の相関がある。また、アサーティブ・マインド・スケールの他者尊重得点と攻撃性得点とは、負の相

関がある。

3. アサーティブ・マインド・スケールの肯定的態度得点が高く、自己評価得点が低いと、攻撃性得点は高くなる。対して、アサーティブ・マインド・スケールの肯定的態度得点が低く、自己評価得点が高いと、攻撃性得点は低くなる。
4. アサーティブ・マインド・スケールの他者配慮得点が低く、自己評価得点が低いと攻撃性得点は高くなる。対して、アサーティブ・マインド・スケールの他者配慮得点が高く、自己評価得点が高いと、攻撃性得点は低くなる。

## 方法

### 1) 調査対象

福岡県立大学の学生を対象とした（女性132名、男性22名）。分析に用いた人数は148名で、調査対象者全体の平均年齢は18.8歳であった。

### 2) 調査時期

2008年10月に実施した。

### 3) 調査内容

#### (1) 攻撃性

秦（1990）の敵意攻撃的インベントリーを使用して測定した。この尺度の項目はBuss&Durkee（1957）によるHostility-Guilt Inventory（HGI）を参考にして作成された尺度であり、この尺度における攻撃の語の意味として“相手に対して何等かの危害を与えることを意図した行動”という敵意的攻撃の意味で用いられている。この尺度は個人の攻撃行動や攻撃性の程度を多面的に測定することを目的と

し、7つの下位尺度から構成されているが、今回は対人関係に着目した調査を行うため、言語的攻撃性8項目、間接的攻撃性10項目、計18項目を使用して測定した。言語的攻撃性得点が高ければ、他人に対する批判、口喧嘩、どなるなどの言葉による攻撃行動をよりとることを示しており、間接的攻撃性得点が高ければ、反抗的な態度を示すことや不当な扱いをしたりするような間接的な攻撃的行動をよりとりやすいことを示している。回答は、“ちがう”（1点）から“そうだ”（5点）までの5件法で評定し、各下位尺度および18項目の得点（以下、攻撃性得点）を求めた。「対人苦手意識場面」は、「この人は苦手だと感じる人を一人おもいうかべてください」、「通常の対人場面」は「友人関係における自分の行動」と教示し、それぞれ回答を求めた。

## (2) アサーション

伊藤（1998）のアサーティブ・マインド・スケール（AMS）を用いて測定した。この尺度はアサーションの心理面を項目化した20項目からなる尺度である。今回の調査では、「自分の気持ちや考えを尊重し、それを表現することへの肯定的態度」として、自己主張に関連している自己表現に対する肯定的態度5項目、またアサーションの中心定義である「他者に対して自己表現する際に相手を尊重する態度」として他者尊重5項目、計10項目を使用した。“全くあてはまらない（1点）”から“あてはまる（4点）”の4件法で評定し、各下位尺度の得点を求めた。

## (3) 自己評価

自己評価は梶田（1988）の自己評価尺度を用いて測定した。これは、自分の現在の状態を思

い浮かべて自己評価するチェックリストIと、自分の理想像を思い浮かべて評価するチェックリストII、自分以外の親しい友人に自分を評価してもらうチェックリストIIIにわけられており、どのチェックリストでも同じ項目が使用されている。この尺度の目的として、自己と他者の両方の評価がどれだけ一致しているかをみるものとして作られたため、他者からのチェックリストが含まれていた。本研究では自己のみの評価に着目しているため、チェックリストIの24項目のみを使用した。

回答は「とてもそう思う」を5とし、「まったくそう思わない」を1とした5件法で回答を求めた。

## (4) 対面コミュニケーションと非対面コミュニケーション

対面・非対面のコミュニケーションのどちらをよくなり、得意とするかについて尋ねる項目を作成した。

## 4) 調査方法

講義終了後に、卒業論文のための質問紙調査であると伝え、協力を求めた。その際、調査で得た個人的な情報は研究以外で使用されることはなく、統計的に処理をするため情報が漏れることはないということを説明した。無記名で回答してもらい、終了した人から質問紙を持参してもらった。

## 結果及び考察

### 1) 通常の対人場面と対人苦手意識場面における攻撃性について

「通常の対人場面における攻撃性得点より、

対人苦手意識場面における攻撃性得点が高い。」という仮説1の検討を行うため、「通常の対人場面」における攻撃性得点と「対人苦手意識場面」における攻撃性得点、下位尺度である言語的攻撃性得点と間接的攻撃性得点について、それぞれt検定を行った。

その結果をTable 1に示す。攻撃性得点では有意差はみられず、仮説は支持されなかった。言語的攻撃性得点については、「通常の対人場面」と「対人苦手意識場面」の間に有意差がみられた ( $t(147)=-2.01, p<.05$ )。また、間接的攻撃性得点についても、「通常の対人場面」と「対人苦手意識場面」の間に有意差がみられた ( $t(147)=3.57, p<.01$ )。

日向野・堀毛・小口(1998)は苦手な人との付き合い方について、ポジティブなカテゴリーとネガティブなカテゴリーの二つに大きく分類されると述べている。ポジティブなカテゴリーとは、相手の態度について理解しようと努めることや、能動的にかかわること、また相手に働きかけるなど、苦手意識の軽減や根本的な解消を目指した長期的・原因除去的な対処法を指す。一方、ネガティブなカテゴリーとは、苦手な人に対して消極的な態度や拒否・回避などの行動をとることを指している。この態度は、苦手な人との間に物理的にも心理的にも距離を保持し、心理的安定の回復を試みようとする態度である。このことから、対人場面の違いによ

Table 1 通常の対人場面と対人苦手意識場面における攻撃性の比較 (n=148)

敵意攻撃的 インベントリー	通常の 対人場面	対人苦手 意識場面	t 値
攻撃性	46.64(10.45)	47.74(13.90)	1.05
言語的攻撃性	19.59( 5.82)	18.78( 6.80)	-2.01*
間接的攻撃性	27.05( 6.25)	28.96( 8.77)	3.57**

+p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01

る攻撃性得点に差がみられなかったのは、ネガティブなカテゴリーとされる態度があったのではないかと考えられる。また心理的に距離をとろうとする態度の背景としては、現代青年の希薄化といった友人関係のあり方とも関係していることが予想される。

言語的攻撃性では「通常の対人場面」において得点が高くなっていった。つまり、通常の対人場面である友人関係では、言語的に直接的な攻撃がなされることが考えられるのに対し、苦手な人に対しては、言語的ではなく、間接的な攻撃がなされることが考えられる。またこのような態度は、先述したネガティブなカテゴリーに分類される拒否・回避のような態度と共通性があるのではないと思われる。また、日向野・堀毛・小口(2000)によると、女性は「対人苦手意識場面」を感じやすく、とくに拒否・回避傾向があることを述べている。今回の研究の調査対象者は、女性の比率が非常に高かったため、「対人苦手意識場面」において間接的攻撃性の得点が高い結果となったと考えられる。これらのことから、コミュニケーションにおいて、どのような対人場面かによって、攻撃性の表出を使い分けていることが予想される。

## 2) 攻撃性とアサーションの関連について

仮説2「アサーティブ・マインド・スケールの肯定的態度得点と攻撃性得点とは、正の相関がある。また、アサーティブ・マインド・スケールの他者尊重得点と攻撃性得点とは、負の相関がある。」について、「通常の対人場面」と「対人苦手意識場面」で検討をおこなった。(Table 2、3)

肯定的態度との関連をみると、「通常の対人

場面」における言語的攻撃性と中程度の正の相関 ( $r=.354$ )、攻撃性と弱い正の相関 ( $r=.264$ ) がみられた。「対人苦手意識場面」では、攻撃性、言語的攻撃性と弱い正の相関 ( $r=.189$ ,  $r=.233$ ) がみられた。

一方、他者尊重との関連をみると、「通常の対人場面」における攻撃性、言語的攻撃性、間接的攻撃性と弱い負の相関 ( $r=-.219$ ,  $r=-.189$ ,  $r=-.192$ ) がみられた。「対人苦手意識場面」では攻撃性、間接的攻撃性と弱い負の相関 ( $r=-.229$ ,  $r=-.253$ ) がみられた。

いずれの場面でも肯定的態度と間接的攻撃性には有意な相関がみられなかったが、概ね仮説は支持された。

肯定的態度と正の相関が示された攻撃性は言語的攻撃性であったことから、言語的攻撃性は、先述した主張性との共通性が考えられる。一方、間接的攻撃性とは関連はみられなかったため、主張性と共通する概念ではないことが予想される。

Table 2 通常の対人場面における攻撃性とアサーションの相関

	攻 撃 性		
	攻撃性	言語的 攻撃性	間接的 攻撃性
アサーティブ・肯定的態度 マインド・	$r=.264^{**}$	$r=.354^{**}$	$r=.113$
スケール 他者尊重	$r=-.219^{**}$	$r=-.189^*$	$r=-.192^*$

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

Table 3 対人苦手意識場面における攻撃性とアサーションの相関

	攻 撃 性		
	攻撃性	言語的 攻撃性	間接的 攻撃性
アサーティブ・肯定的態度 マインド・	$r=.189^{**}$	$r=.233^{**}$	$r=-.105$
スケール 他者尊重	$r=-.229^{**}$	$r=-.141$	$r=-.253^{**}$

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

他者尊重と攻撃性では負の相関がみられた。肯定的態度とは異なる結果が得られたことから、他者尊重はアサーションのなかでも、主張性と共通する部分ではないことが推測される。先行研究ではアサーションと攻撃性の具体的な違いについて明らかにすることが今後の課題とされていたのだが、アサーションの心理的側面を項目化した尺度を使用したことにより、アサーションには自分の気持ちを表現するスキルと同時に、他者への思いやりなどの個人の心理的要因もコミュニケーションにおいて必要であることを改めて示すことができたのではないかと思われる。また、「通常の対人場面」ではどの攻撃性得点とも負の相関がみられたのに対し、「対人苦手意識場面」では言語的攻撃性との相関がみられなかった。このことについては、さらなる検討が必要である。

### 3) 自己評価及びアサーションと攻撃性の関連について

仮説3として「アサーティブ・マインド・スケールの肯定的態度得点が高く、自己評価得点が低いと、攻撃性得点は高くなる。対して、アサーティブ・マインド・スケールの肯定的態度得点が高く、自己評価得点が高いと、攻撃性得点が低くなる。」と予想した。

自己評価尺度とアサーティブ・マインド・スケールの肯定的態度得点の上位50名をH群、h群、下位50名をL群、l群とした。調査対象者をH（自己評価）・h（肯定的態度）群、H・l群、L・h群、L・l群の4群に分類した。この4水準と対人場面の違い2水準（通常の対人場面・対人苦手意識場面）を独立変数とし、攻撃性得点、言語的攻撃性得点、間接的攻撃性得点をそれぞれ従属変数とする2要因混合計画

分散分析をSTARを用いて行った。Figure 1～3はH・h群、H・l群、L・h群、L・l群の攻撃性得点、言語的攻撃性得点、間接的攻撃性得点の平均を図示したものである。

分析の結果、攻撃性得点については、自己評価と肯定的態度について分類した4群の主効果がみられた ( $F(3,144)=3.25, p<.01$ )。LSD法の多重比較によると、H・h群とL・l群の間に有意差がみられ ( $p<.05$ )、H・h群、H・l群、L・h群、L・l群の順に得点が高くなっていった。自己評価が高いほど、攻撃性と関連があることが示された。次に言語的攻撃性については、自己評価と肯定的態度について分類した4群の要因の主効果、対人場面の違いについて主効果が有意であった。 ( $F(3,144)=2.99, p<.05$ )、 $F(1,144)=8.87, p<.01$ )。LSD法の多重比較の結果、H・h群とL・l群の間に有意差がみられ ( $p<.05$ )、H・h群、H・l群、L・h群、L・l群の順に得点が高くなっていった。自己評価が高く肯定的態度が高いほど、言語的攻撃性を表出しやすい傾向があると考えられる。間接的攻撃性については、対人場面の違いについて主効果が有意であった ( $F(1,144)=5.01, p<.05$ )。

仮説4では、「アサーティブ・マインド・スケールの他者配慮得点が低く、自己評価得点が低いと攻撃性得点は高くなる。対して、アサーティブ・マインド・スケールの他者配慮得点が高く、自己評価得点が高いと、攻撃性得点は低くなる。」と予想した。

自己評価得点と他者尊重得点について(1)と同様の手続きを行い、H・h (他者尊重) 群、H・l群、L・h群、L・l群に分類した。この4水準と対人場面の違い2水準 (通常の対人場面・対人苦手意識場面) を独立変数とし、攻撃性得点、言語的攻撃性得点、間接的攻撃性得点

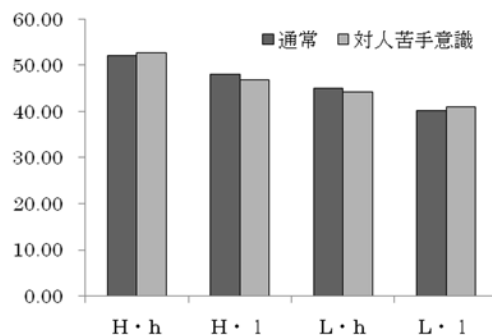


Figure 1 各群の平均値 (攻撃性)

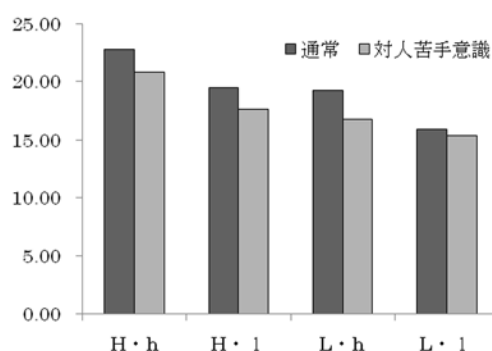


Figure 2 各群の平均値 (言語的攻撃性)

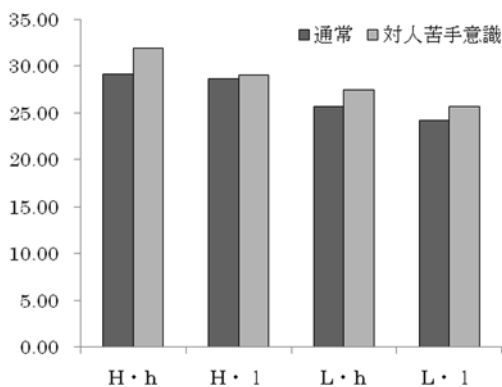


Figure 3 各群の平均値 (間接的攻撃性)

をそれぞれ従属変数とする2要因混合計画分散分析をSTARを用いて行った。Figure 4～6はH・h群、H・l群、L・h群、L・l群の、



攻撃性得点、言語的攻撃性、間接的攻撃性得点の群の平均を図示したものである。

攻撃性得点については、自己評価と他者尊重について分類した4群の要因の主効果に有意傾向が示された ( $F(3,144)=2.38, p<.10$ )。LSD多重比較によると、H・1群とL・h群、L・1群の間に有意差がみられ (それぞれ  $p<.05$ )、H・1群、H・h群、L・1群、L・h群の順に得点が高くなっていた。言語的攻撃性については、対人場面の違いによる主効果が有意となった ( $F(1,144)=4.02, p<.05$ )。間接的攻撃性についても対人場面の違いによる主効果が有意となった ( $F(1,144)=5.61, p<.01$ )。

まず、自己評価に注目して考察をすすめていく。自己評価の高いことが攻撃性と言語的攻撃性を高める結果となったのは、今回使用した梶田 (1988) の自己評価尺度が、二つの面からの自己評価について考えることが可能な尺度であったためと考えられる。その二つの面とは、一つは、客観的な自己評価すなわち他者からの評価からの自己評価と、主観的な自己評価の面である。この自己評価尺度の得点が高い結果であると、客観的な評価としては、自信に満ちて安定し、肯定的・親和的であり適応的に作用する。しかし主観的な評価では過大評価や、非現実的な万能感、自己愛にしがみつき他者に対して否定的である。一方、自己評価得点が低ければ、客観的な評価としては、自信はないものの建設的方向につながりやすく、他者に対して肯定的である。しかし主観的な評価としては、過小評価であり、自虐的で嫉みなどをもちやすいとしている。このように二つの面から総合して考えることが可能な尺度であり、自己評価が高い者は他者からは安定しているように見えても、自己の世界では他者に対し攻撃的な側面を

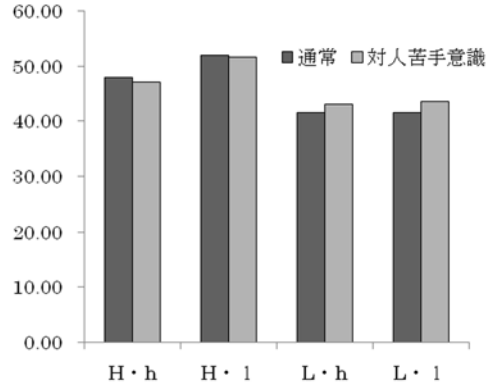


Figure 4 各群の平均値 (攻撃性)

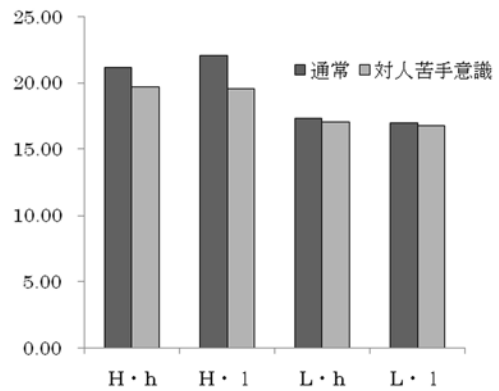


Figure 5 各群の平均値 (言語的攻撃性)

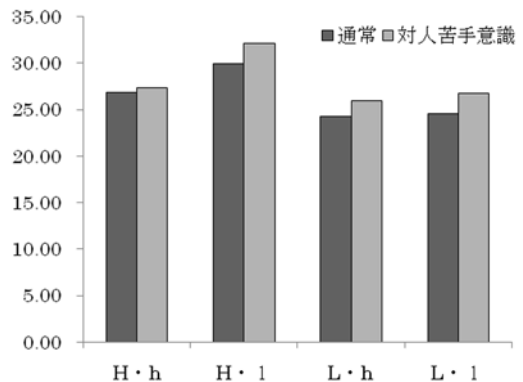


Figure 6 各群の平均値 (間接的攻撃性)

もっていることが推測される。以上のことから、自己評価が高い者は攻撃性が高い結果が示

されたと考えられる。

しかし、攻撃性においては自己評価及び肯定的態度の要因についてのみ関連がみられたものの、言語的攻撃性は自己評価及び肯定的態度の要因に加えて、対人場面の要因との関連もみられた。自己評価や肯定的態度のような個人的要因だけが言語的攻撃性の表出を左右するものではなく、その対人場面の違いが影響していると思われる。そして間接的攻撃性は、対人場面の要因による影響のみが示されたため、どのような人と接しているか、環境による影響があることが予想される。

また、肯定的態度とは異なり、他者尊重は攻撃性への影響は大きくないと考えられる。しかし、他者尊重と攻撃性とは負の相関があることから、攻撃性を抑制する働きはあるのではないかと考えられる。

### まとめと今後の展望

本研究では、言語的攻撃性と間接的攻撃性の違い、場面による攻撃性の違いが明らかになったと思われる。

言語的攻撃性のように、直接相手に自分の気持ちを表現する攻撃性の表出の背景には、自己評価や肯定的態度などの個人の心理的要因が関連していることが予想される。一方、間接的攻撃性は、自分の気持ちを主張しようとする動機づけの役割として働く攻撃性とは異なり、どのような対人関係かでその表出が左右されることが考えられる。この間接的攻撃性には、自分が置かれている環境が影響を与えているのではないかと考えられる。また、間接的攻撃性は、反抗的な態度を示すことや不当な扱いをしたりするような間接的な攻撃的行動をよりとりやすいこ

とを示すもので、現代のいじめの傾向として特徴的なインターネットを使用していじめを行う「ネットいじめ」との関連があるのではないかと考えられる。ネットいじめは、例えば学校の裏掲示板といわれるサイトやブログなどで、自分たちの学校についての悪口、性が混じった表現での書き込み、またはそれ以上の残酷なことが書き込まれている。それは同じクラスの生徒が対象となることもあれば、教師がそのターゲットとなることもある。間接的攻撃性はこういったインターネットを介したいじめの攻撃行動に関連していることが予想され、今後さらに検討していきたい。

### 文献

- 古市祐一 1995 児童用主張性検査開発の試み ころの健康 第10巻 第2号 87-93
- 秦 一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究 第61巻 227-234
- 平木典子 1993 アサーション・トレーニングさわかやかな〈自己表現〉のために― 金子書房(日本・精神技術研究所発行)
- 廣貫優子 2002 現代青年の交友関係に関連する心理学的要因の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第51号 257-264
- Atwater, E. 1992 Adolescence (3<sup>rd</sup> ed). Prentice Hall: New Jersey
- 日向野智子・堀毛一也・小口孝司 1998 青年期の対人関係における苦手意識 昭和女子大学生活心理研究所紀要 通号(1) 43-62
- 日向野智子・小口孝司 2002 対人苦手意識の実態と生起過程 心理学研究 第73巻 第2号 157-165
- 氏原寛 1996 ながて意識の心理 児童心理 第50巻 第4号 289-298
- 伊藤弥生 1998 アサーティブ・マインド・スケール

- (Assertive Mind Scale) 作成の試み 人間性心理学研究 第16巻 第2号 212-219
- 岩永 誠 1991 友人・異性との関係 今泉信人・南博文(編) 人生周期の青年心理学 北大路書房 140-152
- 梶田英一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- 村上宣寛・福光隆 2005 問題攻撃性尺度の基準関連的構成とアサーション・トレーニングによる治療的介入 パーソナリティ研究 2005 第13巻 第2号 170-182
- 長沼恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究 第49巻 146-155
- 西村洋一 2005 コミュニケーション時の状態不安および不安生起に関連する要因の検討 -異なるコミュニケーションメディアを用いた比較 パーソナリティ研究 2005 第13巻 第2号 183-196
- 一 Leary, M.R., & Kowalski, R.M. 1995 Social anxiety. New York Guiliford
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達の付き合い方の発達的变化 教育心理学研究 第44巻 55-65
- 岡田 努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究 第47巻 432-439
- 岡田 努 2002 現代大学生の「ふれ合い恐怖心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究 第10巻 第2号 69-84
- 沢崎達夫 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係 2006 目白大学心理学研究 第2号 1-12
- 白井利明 2006 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴-変容確認法の開発に関する研究(Ⅲ) - 大阪教育大学紀要 第54巻 第2号 151-171
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究 第42巻 21-28
- 渡部麻美 2006 主張性尺度研究における測定概念の問題 - 4要件の視点から - 教育心理学研究 第54巻 420-433
- 一 Wolpe, J. 1958 Psychotherapy by Reciprocal Inhibition. University Stanford Press